

戦争詩歌集事典

高崎
隆治

戦争詩歌集事典

高崎 隆治

日本図書センター

高崎 隆治 (たかさき りゅうじ)

1925年 横浜に生まれる。

法政大学文学部国文科卒。在学中に学徒兵として戦争を体験する。

略 歴 立教大学文学部講師。法政大学文学部講師。講談社

「昭和万葉集」編集顧問等を歴任。日本ペンクラブ会員

主著書 『戦争文学通信』『戦時下の雑誌』『戦時下文学の周辺』
(風媒社)

『ペンと戦争』(成甲書房)

『非戦の歌』(日本評論社)

『文学の中の朝鮮人像』(青弓社)

『戦争と戦争文学と』(日本図書センター)

戦争詩歌集事典

定価 7200円

昭和62年(1987)9月1日

第1版第1刷発行

著編者 高崎隆治

発行者 高野義夫

発行所 株式会社 日本図書センター

〒112 東京都文京区大塚3-4-13(明星ビル2F)

電話 03-947-9387 振替東京2-8206

印刷 モリモト印刷株式会社

製本 株式会社今泉誠文社

ISBN 4-8205-0670-6 C0591 ¥7200E

(落丁・乱丁本はお取替えいたします)

目次

凡例	1
概観	3
昭和十三年（一九三八）	7
昭和十四年（一九三九）	17
昭和十五年（一九四〇）	51
昭和十六年（一九四一）	79
昭和十七年（一九四二）	113
昭和十八年（一九四三）	191
昭和十九年（一九四四）	285
昭和二十年（一九四五）	339
書名索引	359
著者・編者名索引	369
後書き	379

凡例

◆この事典は、日中全面戦争開始から太平洋戦争終結にいたる間に刊行された短歌・俳句・詩の単行本のうち、戦争を主テーマとした三三四冊を選び出し、解題・解説をほどこしたものである。昭和十三年から昭和二十年の間、資料的な価値がきわめて少ないものを除いて網羅的に収録した。

◆ここにとりあげた戦争詩歌集とは、原則として戦地作品や時局的作品が、集の半ば以上を占めているものをさす。

◆配列は刊行年月順とし、同年月刊行のものは五十音順とした。

◆各書目のうち平面に書名のないものを除き極力その印影を写真で掲げた。

◆写真の下には、各書目の書誌的なデータを次の順序に配列した。

・内容分類。……歌集・句集・詩集等

・編（著）者名。

・刊行年月。……年号は昭和を略した

・発行者（社）名。……非売品はそのむね表記した。

・判型／頁数。

◆書名は太字で示した。書名の上に歌集・句集・詩集等とあるのは、原本のタイトル表記によった。ただし、巻末の書名索引ではこれを除いて配列した。

◆内容がほぼ同一で書名変更、または再刊されたものの場合別個にとりあげることせず先行する本の解説でふれた。

◆引用作品は、できるだけ代表作と思われるものや意味のある作をとりあげることに努めたが、詩の場合など紙数の関係上一部抄出や、また、改行を／で、一行あきは改行で示したものもある。表記は原則として原典どおりとしたが、あ

きらかに誤植と思われるものは訂正した。

◆読みがなは原則として省略した。

◆巻末には、著（編）者名の索引と、書名の索引を付した。

戦争を主題とした文学作品が、文学上の主流となるのは日中全面戦争以後のことである。

およそ、文学にたずさわる者が、直面するさまざまな現実や、そこに生じる内面的な思念から、自己にとつてもっとも切実な問題を、みずからの主題として選択することはきわめて自然であり、戦争を主題とした作品が、この時期にわかに浮かびあがってきたのは当然の帰結であつた。

もとより、職業的文学者に対しては、そういう主題や素材が、外側から要請されたり、また現実的な問題として、それとは異質な作品の発表の場が急速にせめられたという事情はあつた。だが、その担い手のほとんどすべてが職業的専門家ではないといふる、短歌・俳句・詩といった韻文の世界では、題詠として要求される場合を除いて、主題の選択は作者の自由に属する事柄で、短歌における自然詠のごとく時代の動きに無縁な存在がありえたわけである。にもかかわらず、短詩型文学の世界にまで戦争の足音が高まつたのは、好むと好まざるとにかかわらず、戦争とは別の状況の中に生を営むことが、人びとにとって不可能となつたからにはかならない。

ところで、戦時下の、それら戦争を主題とした作品が、ジャンルのいかに問わず敗戦とともにただちに社会的にも文学的にも全否定され抹殺されたのは周知の事実である。文学作品が一部の職業的文学者の手になるもののみであつてはならないし、とりわけ短詩型文学の領域では、一般に作者は読者であるとともに評者でもあるという関係から、つくり手のほとんどすべてが無名の大衆であつて、その作品数も天文学的な数量となる。だが、そのゆえにそれら無数の作品群は、通覧し通読される機会をも失う結果となり、一部の専門家の作品がその時代を代表するものと誤断されるといふ悲劇が起きた。しかしながら、戦時下といえども、個の生命やそのありようはさまざまであつたし、それら生命の一つ一つの営為は、多数の中の個が個として尊重されなければならないいま、改めて見直されなければならないはずのも

のであろう。その機会が、戦後四十年以上を経ていまようやくめぐってきたように思われる。

ところで、さきに短詩型文学作品の数は天文学的と記したが、短歌を例にとれば、結社誌における戦争詠の特集は無数であり、また特集によらざる日々の歌の中の時局詠・戦争詠は、むしろ特集をはるかに超える数量として存在する。おそらく、そのすべてに眼を通すことは、たとえ全資料が揃えられたとしても不可能であらう。だが全資料の最大公約数と考えられる単行本資料を通覧することはそれほどの難事ではない。

ちなみに、ここに解題・解説をほどこしたそれら歌集・詩集・句集は、総計三三〇余点に達する。もちろんこれがすべてではないが、その大部分であるといえる。

数量順では、短歌、詩、俳句ということになるが、實在数もまたその順である。いま、ジャンル別にこれらを概観するに、まず短歌の分野では、大づかみない方をして、大日本歌人協会編の『支那事变歌集 戦地篇』（昭15）は、何をおいても筆頭にあげなければならないものである。前線兵士や軍属・看護婦等の現地詠がここに集大成されている。同じく、大日本歌人協会編の『支那事变歌集 銃後篇』（昭16）は、戦線に夫や子を送った女性の作品を中心に、戦争のただならぬ様相が、国民一般に一步一步迫ってくる情景を写し出した時局作品としてもよくまとまった集である。この二歌集が結社を超越した集であるのに対し、結社のものとしては、アララギ年刊歌集別篇の『支那事变歌集』（昭15）が、質的に群を抜いた存在であることは否定できない。

この時期もそれ以後も、短歌の場合は合同歌集が多数の作者を背景とした強みを発揮し、個人歌集を質量ともに圧倒する。個人歌集では『葉莖集』（昭15）やあるいは石毛源の『江南戦線』（昭14）などが特にすぐれているとみられる。個人歌集が合同歌集に拮抗しえない最大の理由は、戦争という非日常の極限状況下では、人間の情緒の振幅がきわめて大きいために不可避的に負の価値が混入するからである。その意味で、右の三著や、戦中作品を戦後にまとめた宮柊二の『山西省』（昭24）などの個人歌集は例外的存在といえる。なお、戦争末期の学徒勤労動員のまつただ中に編まれた日本女子大生の『茶の花』『白堊』（ともに昭20）などのグループ歌集も、他に類のないものとして

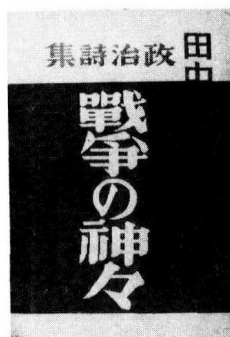
注目にあたいる。

一方、短歌がこのような特色をもつのに対し、詩の場合は無名者の作品にみるべきものは少なく、合同詩集では山本和夫編の『野戦詩集』（昭16）、銃後詩として中山省三郎編の『国民詩 第二集』（昭18）などがあげられるのみである。この場合も戦争詩は前線での作品が特にすぐれ、山本和夫、久須耕造、西村皎三らのほか、桜岡孝治の『東望』（昭17）や吉田嘉七の『ガダルカナル戦詩集』（昭20）が、その代表となる。また戦場体験をもたない著名詩人の銃後詩では、金子光晴、小野十三郎および堀口大學の一部の作品が、時代を越えて今日もなお詩として十分な手ごたえをもっている。一方、俳句に目を転じると、ここには短歌や詩とは趣きのちがう独自の世界があることがわかる。つまり、合同句集にはほとんど特筆すべきものがなく、戦争句集はすべて個人句集によって支えられているかの観がある。富沢赤黄男の『天の狼』（昭16）を始め、片山桃史の『北方兵团』（昭15）、岡本圭岳の『大江』（昭15）、田中桂香の『征馬』（昭15）、長谷川素逝の『砲車』（昭14）などといったぐあいである。

わずかに例外とみられるのは、傷病兵の合同句集、四阿ぐるうぶの『暦日』（昭15）ぐらいのものであろう。なお、当時の占領地で編集・刊行された南支派遣軍の『兵隊の祝祭』（昭16）や、比島派遣軍の『南十字星文芸集』（昭17）などは、短歌・俳句・詩の三領域にまたがるものであり、現地刊行物という別の意味においても特記されるべきものであろう。

昭和十三年（一九三八）

戦争の神々



・詩集
・田中喜四郎
・昭和13・4
・日本社
・B 6判 / 三一頁

後記で作者は自作を説明し、「この書の内容の詩篇を自分は政治詩と名づけた。こう云ふ名の詩が在るかどうか自分には知らない。経済問題、外交問題、政治問題、軍事問題、社会問題等を扱った詩を政治詩と総称したい」と記し、また「詩の神聖を汚すものだと日本のおえらい詩人や、頭脳明徹なる日本の詩論家から、小言を喰ふかも知れない」と記している。

「詩の神聖を汚す」というのは被害妄想だが、率直に言えば、絶叫調の政治的なプロパガンダを行分けして形だけ詩のような体裁をとったもので、過激な演説としかいいようはなさそうである。人の思想がそれぞれ異なっているのはさしつかえないが、己れ一人を尊しとし、日本以外の世

界を野蛮呼ばわりし、非道・背徳・侵略・低劣・野心・強慾などと罵倒するだけの作、言い換えれば独断と偏見と憎悪の集積から「詩」は生まれようはずもない。作者が、「帝国軍隊」の一員として軍隊生活を経験し、また野戦に参加していたならば、少くとも中国軍に対する認識などはちがつていたであろう。

「吸血鬼」「支那の軍律」「亜細亜の悲劇」「戦争の指導者」など十四篇を収録。いずれも日中全面戦争開始直後の昭和十二年秋につくられた作品である。

「支那の軍隊」

(略)

婦女に暴行するものは

死刑に処すと

書いてあるではないか

支那人はかかる行為を

日々実行して居るではないか

民間の財物を

盗取するものは

死刑に処すと

書いてあるではないか

(略)



・詩集

・西条八十

・昭13・7

・日本書店

・B6判／三二頁

戦火にうたふ

昭和十二年十二月、上海戦および南京戦の戦場視察に赴いた作者の詩四十五篇をまとめたもの。巻末に日記風の散文を添えている。詩といっても、大部分はいわゆる歌謡でありそのうちの何篇かは実際に曲がつけられ歌われた。後に「同期の桜」として海軍航空隊などで愛唱された軍歌は、作者不詳とされていたが、その原詩は紛れもなく西条八十の作でこの詩集に収められている。

「二輪の桜——戦友の歌」

君と僕とは二輪の桜

積んだ土囊の陰に咲く

どうせ花なら散らなきやならぬ

見事散りましょ、皇国のため

(第二・第三連略)

君と僕とは二輪の桜

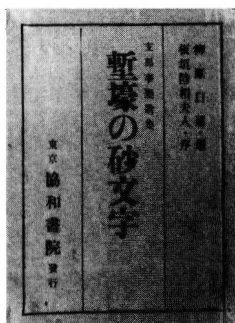
別れ別れに散らうとも

花の都の靖国神社

春の梢で咲いて会ふ

なお、作者は「南京攻略戦」直後に南京とその周辺を見学し、戦争と戦場の一端にふれたことで、条件つきではあるがいわゆる「戦争想望」の作ではないリアリティの濃い作品もつくっている。しかもそれらの詩篇のほとんどが心に迫るような哀愁を漂わせているのは、作者が庶民的な感覚や感情を失っていなかったためであろう。自序には次のように記されている。

「応召兵士の払った多大の犠牲について、なほ深く考へねばならぬ。さらぬだに貧しい家計の人柱——老齢の母、病める妻、足手まとひの幼児、途中にして放棄されたる家業の前途、等々、そこには我等が涙を流す映画ニュースの事実よりも、更に痛苦なる悲惨事の累々横はるを知らねばならぬ。」



支那事変歌集 塹壕の砂文字

- ・ 合同歌集
- ・ 宮崎燁子編
- ・ 昭13・9
- ・ 協和書院
- ・ A6判/二〇八頁

「塹壕篇」と「銃後篇」の二部に分けられているが、大部分は「銃後篇」であり、戦場詠としての「塹壕篇」は全体の約二割強ほどしかない。日中全面戦争当初のことでもあり、また、結社誌によらず、新聞（朝日・東京日日・読売・都・福岡日日）や、編者のかかわる二、三の雑誌の投稿歌を主体に編纂しているので、結社誌を中心としたものにくらべ総体としての質はやや低い。しかし、投稿歌壇を中心として編んだ戦争歌集は少なく、この時期における投稿歌の一般的傾向は把握できる。収録歌数約千六百首。秀歌とみられるものの九割は戦場詠で、「銃後詠」は観念的で戦争の実体がわかっていない。それよりも、身辺に応召者をもつ者以外は戦争を風俗のようにしか感じていないの

が致命的である。序歌・板垣喜久子。

・ たたかひに出てゆく我に幼子の手をさしのぶる常の如くに
（穂積 肇）

・ 馬の背を手を探りつつ鞍置きぬ夜をこめて敵地駆け抜けむとす
（石川 清）

・ 背囊のなかのしなじなかつくる友等も吾も言葉すくなし
（竹村 豊）

・ 下腹にひびき轟く砲声に今は馴れつつひもじさに居り
（山田 渾実）

・ 凍りたる飯温むる火さへなし齒に沁み徹る冷たさを噛む
（森島 章）

・ 戦死にし子の愚痴の多しと里人のさらへるおうなごまりて小さし
（中島若葉）



・合同歌集
・書物展望社編
集部編
・昭13・10
・成史書院
・新書判／二八四頁

聖戦短歌集

日中戦争期の戦争歌集として、当時もつともよく知られた改造社版『支那事变歌集』より二ヵ月早い戦争歌集である。序文に「今次の事变が偉大な芸術作品を生んだ。中でも最も大いなるものは、和歌の世界である。……随筆や小説の専門家達の描く世界以上のものを深く深く詠み込んでゐるではないか」とあるが、戦争を主題とする文学というかぎりにおいて編纂者のその文学観は確かである。小説というジャンルを最上位に置くのが通念だが、少なくとも日中全面戦争の段階では短歌が他の文学ジャンルをはるかに引き離していた。ただしそれは現地詠と、一部女性の銃後詠についていえることで、内地の専門歌人の作品は別である。

収録数約千五百首のうちの五十首ほどは銃後詠である。それぞれの出典は明らかにされていないが、作者名から判断すれば、大部分が結社誌からとられたと推定される。

・汝をおもひ泣かぬ一日もなしといふははそはを神よ守らせたまへ
(藤川忠治)

・目の前の土はねあげし跳弾は右頬にあつきうなり曳きたり
(川野弘之)

・戦に來し身はかなみ焼け残る部落の壁にわが名を記す
(鈴木清太郎)

・吐く息の洩れゆくとわれ知りし時言かなしおのが生命を言はず
(鈴木英夫)

・さりげなくこをもてゐよと渡したりわが毛髪つつむその紙包み
(寺内貞一)

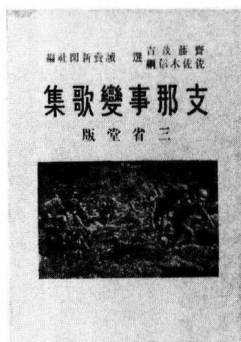
・馬を売り妻子六人残し征く山本甚兵衛軍歌を止めず
(中野 登)

・千人針われに征旅の夫ありて祈りは熱しぬはしめたまへ
(井戸川美和子)

・征きしまま便りはあらぬ戦場にきほへる夫を我疑はず
(山本初枝)

読売新聞が昭和十三年四月から募集した懸賞短歌の約半年分の応募作品のうち、予選を通過し文芸欄に掲載されたものの中から、八百首を選んで収録した歌集。
応募総数は半年間で約七万六千五百首に達したといわれ、斉藤茂吉と佐々木信綱が隔月にその選にあたった。
内容は茂吉と信綱選に分かれ、さらにそれぞれ「現地篇」と「銃後篇」に区分されているが、量的には日中全面戦争当初のことであり「銃後篇」が圧倒的に多い。しかし「銃後篇」の大部分は、ただたんに戦争または兵士を題材にとったというだけで、戦争がけつして他人ごとではないにもかかわらず、精神の緊張度はきわめて低い。たとえば次のような歌である。

支那事変歌集



・合同歌集
・読売新聞社編
・昭和13・12
・三省堂
・四六判／二〇九頁

・大君に征夫を捧げて子と共に見つる朝の桜明るし

おそらくこれはまったくの空想歌であろう。こういう作品がどうして選ばれたのか不明だが、戦意昂揚を意図したものとしても粗末に過ぎる。次のような諸作にくらべればそれはいっそう明らかであろう。

・斥候に出でゆかむとして時の間あり廿七年の生命想へり

（森上等兵）

・泥濘道いづこまでかつづく西の方嘉善の塔は見えつつ遠し

（今宮得也）

・彈丸乏しく日暮迫れる塹壕に今日も保ち得し命をおもふ

（河野 稔）

・呉服屋の店に日すがら客群れぬ綿禁制は明日に迫りぬ

（中島元徳）

・吾と同じ鬚もありたり他部隊の埃にまみれ入り来る見れば

（片桐 渡）

・ゴム靴の値の高ければ村挙りて廃りし藁の靴を編みをり

（小林朝虹）